

## 第2部

### シンポジウム

# 代表経験から次世代へ伝えられること

シンポジスト : 早川 直樹 (5大会連続サッカー日本代表コンディショニングコーチ)  
後藤 健生 (サッカージャーナリスト)  
北澤 豪 (元サッカー日本代表、サッカー解説者)  
李 宇諤 (元サッカー韓国代表 (アトランタオリンピック出場)、法学部准教授)

司会 : 山本 浩 (元 NHK エグゼクティブアナウンサー・解説委員、法政大学教授)

飯田 サッカーをテーマにしたシンポジウムを8年ぶりに専修大学で開講することになりましたが、これにはいろいろな理由があります。一つは、1993年Jリーグが開幕し、開幕の時にピッチに立っていらっやした北澤選手もいらっやっていますが、それから25年の月日が経っています。ワールドカップも行われたと言うことで、サッカーの世界では非常に節目になる年だと思えます。この節目にいろいろな方をお呼びして専修大学でできることを大変嬉しく思っています。

これから始まる第二部では、先ほど一部で基調講演をいただいた早川さん、元代表選手の北澤さん、ジャーナリストの後藤さん、そして総司会元NHKの山本さん、それから専修大学を代表して、韓国代表で活躍され、北澤さんと同じように代表でナショナルフラッグを背負って活躍された李宇諤先生にも登壇いただき、ぜひ日韓のサッカーの話とか、そういうところにも話を広げていって貰いたいと思えます。それでは、まず映像を見てください。

飯田 それでは、これから一人ずつご紹介させていただきます。まずは5大会連続 約20年にわたって日本代表のコンディショニングコーチを務められており、現在は日本サッカー協会フィジカルフィットネスプロジェクトリーダーでいらっやる早川直樹さんです。よろしくお願ひいたします。

次はサッカー専門のジャーナリストとして長い間ご活躍されております後藤さんにご登壇願ひます。後藤さんはいろいろな出版物を多数出されていますので、目を通した方もいるでしょう。今日はどんな話が聞けるか楽しみにして貰いたいと思えます。

北澤豪さんよろしくお願ひいたします。元日本代表で日本サッカー協会理事を務められ、日本障がい者サッカー連盟会長、JICA オフィシャルサポーターなど様々な分野で、サッカー以外でもご活躍されています。

続きまして、本学を代表し、元韓国代表の選手で、Kリーグ・Jリーグで活躍されました李宇諤先生にご登壇いただきます。李先生よろしくお願ひいたします。

そして最後に、この後私からバトンタッチいたしますNHK実況アナウンサーとして活躍され、現在は法政大学の方で教鞭を執っております山本浩さんにご登壇いただきます。よろしくお願ひいたします。

山本 今日のこのセッションは、4つのブロックにテーマを分けて話を聞いていきたいと思います。大きなタイトルは「ワールドカップの経験をこれから先、未来にどう繋ぐか」、ここに絞っているわけですが、その4つのブロック、まず最初は「フィジカル」です。このフィジカルについて話を進めていきます。主役はおそらく早川さんになるんじゃないかと思えますが、まず後藤さんから話を聞いてみましょう。

後藤さんは、日本のサッカーをこの中で一番長くご覧になってきたわけです。このフィジカルについて日本の中の変遷をお聞かせいただけますか。

後藤 フィジカルの変遷。とにかく、今の選手はフィジカルで負けないですよ。フィジカルと一言で言っても、瞬発力から持久力からいろいろな側面があるわけで、日本人のフィジカルで何が一番強みなのか、どこが弱点なのかというのをしっかり見ていかなければいけないと思えます。それと今は他競技でも昨日メジャーリーグで新人王を獲った大谷選手なんか、フィジカルやパワー、つまりアスリート能力においてメジャーリーガーを凌駕している部分があるわけで、日本人がフィジカルが弱いと決めつける必要はない。これから日本人の特性に合ったトレーニングをしていけば、フィジカルで負けることはない。もしかしたら、ある部分では日本人はフィジカルが強い、と言われるような時代が将来来るかもしれないと期待しています。

山本 北澤さんの時代は、フィジカルとは言わず、ひょっとして体力とか言っていましたか？

北澤 そんなに古くないと思えます。フィジカルと言っていました。



シンポジスト：左から、李宇諤、北澤豪氏、後藤健生氏、早川直樹氏

**山本** その頃は何を求められていましたか？

**北澤** それほど変わらないと思います。トータルのものは必要ですし、個人個人、パワーがある人もいるでしょうし、僕の場合は持久力と俊敏性の両方持っていたので、それをどう活かすかということでした。コーチに言われるよりは、それぞれの選手が自分の特徴を知っていて、それなりに自分で道づくりをしていたと思います。

**山本** 北澤さんは現役時代に日韓戦で戦って見ていかがでしたか。我々メディアの世界から見ると韓国の代表とは体力の差がある、フィジカルの差があるんじゃないかと。

**北澤** 日本は韓国のパワーには敵わないです。意外なところですが、腕力で引っ張られるとか手を押さえられるとか、それはけっこう必要な力であって、サッカーの選手は上体にそんなに力が必要じゃないかというところすごく必要なんです。そんな時に日韓戦だと差を感じるの、当たらないようにしないといけない。引っ張られないように、先に逃げるというか、先に読んでいかないと勝つことができないです。

**山本** 韓国の場合はどうですか？ フィジカルが選手になる時に特に大事という受け止め方ですか？

**李** そうですね。韓国の場合はまず走れないといけない。戦わないといけない。今思うとメンタルですよ。勇気を持って自信を持って、そしてフィジカルをどうやって活かすかということです。試合を最後まで強い気持ちでやり切れるかどうか。それはメンタル面から強く影響されます。メンタルが弱い人はフィジカルの強さを出し切れなまま終わってしまうことがよくわかりました。ボールが無くてみみんな45分走れますよね。だからと言ってフィジカルが強いという評価はできません。

**山本** 北澤さん、今メンタルの話が出ましたが、日韓戦戦うときのフィジカルの中にメンタルも入れるのかという。この辺は戦って差を感じることはあったんですか？

**北澤** ありますね。そこは前面に表現というか、発揮してくるので。さっきぶつからないと言うと、逃げていたというような印象ですが、それを感じながら負けに行かないと、勝敗に直結してしまう。韓国の選手は、徴兵令のことや、軍隊での訓練をしたことがあるのか、3階から飛び降りたことがあるのか、といった話をしていました。国を守らなければいけないといういろいろな厳しい部分も経験してきた中での違い、国を背負う強さというのは韓国の選手にはあったので、負けてはいけません。それを打ち返すような戦いがあったと思います。それは今、この関係だけではなく、世界

どこでも同じかな。南米も特にそこは強く出ずし。

**山本** 世界を股にかけている後藤さんから見ると、そのフィジカルの要求というのは世界どこでも変わらないですか？

**後藤** 今は世界のサッカーがすごく共通化していますが、例えば昔は南米の人たちはテクニクや当たりの激しさというのにはありましたが、走行距離という面ではヨーロッパの方がはるかによく走っているというような、国よっての違いがあった。もう一つ選べば、日本と韓国の違いは、第二次世界大戦前の日本が韓国・朝鮮半島を植民地支配していた時代というのは、朝鮮のチームは日本の大会に出場していま



司会：山本浩氏



した。そこで既に朝鮮半島のチームと日本のチームが戦う場合、彼らのフィジカルにどうやって対抗するかというのを日本のチームは常に考えていた。これが今の日本のサッカースタイルを形成する非常に重要なファクターとなっていると思います。隣に、似てはいるがちょっと異質なサッカーをする強い国があるというには本当に大事なことだと思います。

**山本** 早川さん、フィジカルの実際の指導の現場にいらして、日本の選手たちが実際にフィジカルを獲得していく過程。これは、代表チームのスタッフの組み方もある意味でクラブにじわじわ浸透していったと思います。早川さんが初めて参加された2002年の大会の頃の代表チームのフィジカルに関わる人たちのメンバー構成と、最近との違いを説明していただけますか？

**早川** 2002年から代表チームにおり、この時はフィジカルコーチが1名、トレーナーが3名、ドクターが1.5名。なぜ1.5かというと、日本人のドクターが1ですが、トルシエ監督が大会の時だけフランスからフランス人ドクターを呼び、選手を見るというよりトルシエ監督を落ち着かせるというような意味合いがありました。このフランス人のドクターが非常にできた方で、日本人のドクターを立てながら、ものすごくバランスよく仕事をしていました。ということで1.5です。

2018年は、フィジカルコーチが2名、アスレチックトレーナーが4名、ドクターが2名。こう変わりました。2002年は僕はトレーナーでフィジカルコーチをサポートしていました。今はフィジカルコーチは固定で2名、トレーナー4名、ドクターは必ず整形外科と内科各1名という構成です。

**山本** フィジカルコーチとアスレチック

レーナーの違いを教えてください。

**早川** アスレチックトレーナーは、基本的にはリハビリと治療、マッサージのようなケア、怪我を予防するのが役目です。フィジカルコーチは、コンディションを維持する、うまくすれば1ヶ月間など短い時間で少しでも個人のコンディションを上げていく。チームとしては、大会が進めば体力が疲弊してくるので、落ちてくるものをなるべく落ちないように平行に保っていくというのがフィジカルコーチの仕事です。

**山本** 後藤さん、こういう体制が変わったということで、代表チームのフィジカル面で大きな違いが出てきているのでしょうか？

**後藤** これはいろいろな要因があると思いますが、例えば、1998年に初めて日本がフランスでワールドカップに出た時、1戦でアルゼンチン、2戦でクロアチアに敗れ、3戦でジャマイカでしたが、もう3戦目の頃にはこれ以上戦えないという状態だったのではないかと思います。それからそのあと、2002年、2010年はベスト16まで行ったが、ここでもし勝ったとしても次はどうなるかという感じがありました。それが今回はベルギー戦で最後は負けましたが、もしあそこでベルギーに勝ったとしても、あと1試合、あるいはさらにベスト4に進出してあと3試合、十分に戦えたのではないのでしょうか。これは西野監督が途中でメンバーをローテーションさせたこともありますが、やはりそれだけゲーム体力がついてきて経験を積んできて、もしワールドカップ7試合を戦えるという状況になったら、最後まで日本チームは戦えるようになったとゲームを見てすごく感じました。西野さんもすごくそこを強調していました。

**山本** 李先生は、他の大学でのサッカーの指導経験がありますし、いま大学日本代表のコーチをされています。日本の若い世代の選手たち、特に代表に近い選手たちは、昔見ていた日本の選手とフィジカルは違いますか？

**李** そうですね。今の大学生は、フィジカル的には全く問題がなさそうです。大人のプロのチームと戦っても、大学生や高校生でも上のクラスの人は遜色なく戦える。現役の人でもプロに呼ばれて、今は強化指定の制度もあるので、プロで活躍できる環境もあるので、フィジカル的には問題ないと思います。

**山本** 北澤さんの時代のフィジカルと今の選手のフィジカルを見たときに、北澤さんの目から見た大きな違いはどこになりますか？

**北澤** 測定で程度の数値が出せているか、それをゲームで使えているかという差が、前はあったが、今はなくなってきている。多分ユース年代では数値的に同じぐらいのパワーを作っています。早い段階からそれが生成されれば、経験をゲームの中で活かしていける機会が多くなって、それが大学の期間間だと思います。そうするとプロに移行しやすくなってきているという人材がたくさん発掘できるような形になってきている。教える側が増えているということもあると思います。

**山本** 一方で、日本代表のフィジカルに関し、やり残していることはありますか？

**北澤** 日本代表かどうかはわかりませんが、カウンセラーが必要だと思います。勝負の世界にいと上手くいく、上手くいかないのところの不安定さで、せっかく作ってきたフィジカルが発揮できなかったりする。今は海外だと中学生の年代のカテゴリーにもそういったカウンセラーをつけているところもあるので、当然トップには必要だと思います。どうやってフィジカルを引き出していかということですね。

**山本** これは第一部で早川さんが指摘されたメンタル面の対応になりますね。

**早川** メンタルトレーニングについては、まだまだ僕も勉強不足ですが、さっき言われていたように、メンタルを強くして試合に臨むためのトレーニングというものもあると思いますし、北澤さんがいま言われたように一生懸命やっているが、いろいろな事情で力が発揮できない。そういったときにやはり人間なので、どこかで愚痴を言ったり、はげ口があったりというのがすごく大事だと思います。あとは、チームを一丸にするというのが、みんな分かっていますがどうしても我が出る。人間なので。試合に出られなかったら悔しいので。そういうときの選手の気持ちをどういう風にチームとして一つにしていくのか。メンタル面で取り組まなければいけないことは、けっこう多角的な要素があると思います。そういうところをきちんと整理する必要があります。今メンタルの方は心理学者といわゆるメンタルトレーナーという、アカデミックな方と現場の方と両者がいますが、そこをどうやって統合して現場に入ってい

ただのかというのが大事になると思います。

**山本** 後藤さんは指摘の中で、セットプレーのディフェンスについて改善の余地があると。これはフィジカルもかなり影響がありますか？

**後藤** 最終的にはセンターバックのフィジカルは大事な部分ではありますが、そこもやはり戦術的な話でもあるのです。さっきの早川さんのお話で壁が飛ぶか飛ばないかという話がありましたね。相手を分析してどう守るかという。そういうことを代表に入ってからやるのではなく、ユース年代からそういうことをもうちょっと見直して取り組んでいかないといけない。とにかく、今回のワールドカップはセットプレーからの失点が非常に多くて、あれをせめて半分に減らしていったら日本はグループリーグを首位で通過できたはず。そして、ラウンド16でベルギーと当たらなければ、もう一つ別の山に入っていればベスト4も狙えたんじゃないか。今回の試合で一番悔しかったのはその部分ですね。ディフェンスの改善で大事なのは戦術面が一番かな。もちろん、フィジカルもメンタルもすべてですよね。際どいセットプレーの場面では非常にメンタル大事になるでしょうし。最後のベルギー戦のコーナーキックを取られてカウンター。あそこでもうちょっとメンタル面が強ければ落ち着いて状況を判断できたかもしれないし、メンタルを強くするためにはフィジカル的に疲れていたらものを考えられないですから、全て含まれています。

**早川** 壁の話は誤解のないようにしておきたいので。試合の前のミーティングで、コロンビアの選手は壁の下を狙う選手がいるので、気をつけなければいけない。それはみんな共有していた。でも、100%下じゃないから、上も考えなければいけない。当たり前のことですが。最初は、爪先立ち程度で、ボールが通らない分だけ飛ばうということになった。実際下を抜かれて失点したので、試合が終わった後に、なんで飛んでしまったんだということになります。壁に入っていた選手が、私は飛んでないと。終わった後映像見たら、ものすごいジャンプしていた。でも選手の気持ちは、低いジャンプだった。

**北澤** そんなに低いジャンプって難しくない？

**早川** 難しい。そういうのは経験で、相手がそ

ういう狙いがあるとなつたとき、これだけ飛ぶってのは通用しない。興奮しちゃっているから。なので、飛ぶか飛ばないか、そういう風に継承していかないといけないなと。

**北澤** 誤解されてもいけないけど、あの角度からいうと多分、飛ばないって頭あったんだろうけど、あれは下を狙える角度ではなかった。

**早川** 上の可能性のほうがあった。

**後藤** 最近、新発明の壁がありましたよね。選手が飛ぶんだけど、その下に一人寝ているという。これから日本チームに取り入れて欲しいと思います(笑)。

**早川** そんな話題も出ましたよ。下狙われるから、一人下に居るか、みたいな。選手同士でそんな話題もありました。

**山本** ハンドしないようにしないとね。

**早川** そうですね。

**山本** 第2のブロックは「技術」の問題です。世界と戦う技術。李先生、韓国のチーム、私が昔覚えているのは、まだ戒厳令がある頃の日韓戦の時代ですが、体力はあるけど技術は日本のほうが上だろうということを考えていた時代がありました。その後韓国が急激に技術も高くなってきました。韓国の技術に対する評価はどうだったんですか？

**李** 技術・スキルよりは、まず勝つ。試合では勝たなければいけないんだという気持ちで入っていました。もちろんテクニシャンもいたり、フィジカル中心の選手もいたんですが、結果的には勝つためのサッカーをやっていました。でもどうしてもシンプルになってしまうんです。必ず速い選手がいて、その選手が点を入れるあるいはアシストするというパターンが多かったです。日本ではなかなかそういうチームはなかったですね。だから逆にやりづらかったと思います。そういうサッカーをやるしかなかった。勝つためのサッカーをやっている、それがスキルにつながっているというか。前と後ろはいい選手が育っていましたが、中盤がいないです。そういう弱点もあります。

**山本** 韓国では過去にユン・ジョンファンとか、非常に技術の高い選手もたくさん…。



**李** たまたまじゃないでしょうか。テクニシャンと言われてるのは、ユン・ジョンファンとか、コスモ石油にいたキム・ジョンスは天才と言われていましたが、中盤のテクニシャンがたまに出ます。人数的にはフォワードかセンターバックの方が多い。速くて強いのが前にいて、それを守るのでセンターバックもそうなっているという環境ですね。中盤が少なく、日本のようなパスサッカーがなかった。ちなみに僕は中盤もやりたかったんですが、この身長もあって、なかなかチャンスがなかったです。

**山本** Jリーグの始まる前のJSLというサッカーの時代に、技術でいうとやはり読売クラブは非常に高いものを持っていた。

**北澤** そうですね。技術が全てじゃないですかね。やはりボールを失ってしまえば状況が変わるので、それをボールを止めるという技術がまずなければいけないですし、狙ったところにボールを供給できるパスの技術がなければいけない。その平均値が高いのが代表選手だと思います。それが成功率が5割以下の選手は選ばれない。仮に代表に来てても信頼感がないので、ボールが出てこなくなっちゃう。そこは絶対的な要素でしょう。上に行けば行くほど10回中12回ぐらいできるようなじゃないといけない。

**山本** 早川さん、これは代表チームの合宿に集めてきて、技術を磨けというわけにはいかないんですか？

**早川** 全くいけません。技術を代表合宿で高めるとするのはやりません。オリンピックチームなどは足りないところは練習の後に残って、個別に練習をしますが、A代表で技術を磨くのに時間をかけるのは難しいです。ただ上手くはなります。例えば、名前を出すと失礼か



もしませんが、横浜マリノスの中澤選手などは、代表チームに来た時はヘディングでは日本一でしたが、練習の後、熱心に継続して技術の練習をするので、代表になってからも技術が伸びました。小さい時に上手くなっておかないと上手くなれないと言いますが、そんなこともなく、技術も体力もきちんと練習していけば必ず向上していくと思います。

**山本** 後藤さん、日本代表の技術は世界のスタンダードから見るとずっと高いままではいるんでしょうか？

**後藤** 高いまま、と言われると、僕が若い頃は、日本のサッカーが一番技術が下手な時代でした。東京オリンピックで非常に優秀な選手を集めて強化した、その後の世代がまたレベルが下がっちゃった。先ほど韓国は体力で日本は技術だという話がありましたが、1970年代80年代は技術も精神力も体力もあらゆる面で韓国には敵わなかったし、東南アジアの選手のテクニクと比べたら日本はどうしようもなかった。だから今と全然意味が違うんです。当時は個人技で対戦したら技術で圧倒的に劣るので、日本はパスサッカー（ロングボール）で対抗しようという方針でした。ところが今は、日本は技術があるからその技術をどうやって使うか、そのためにパスを使うんだということで、全く意味が違ってきています。ただ、長い目で見れば、第二次世界大戦前から考えれば、日本のサッカーはどちらかと言えば俊敏性を活かして技術でパスをつなぎながら戦うという方針です。これはベルリンオリンピックでのスウェーデン戦に勝ったときもそうだし、東京オリンピックの時期、一時強くなった時代もそうでした。やはり基本的にはそれが日本サッカーの特徴であることは間違いない。こういう特徴は本当に長い時間かかって変わらない。ブラジルのサッカーはどんなに近代化してもブ

ラジルのサッカーだし、アルゼンチンのサッカーも1940年代の黄金時代から同じことをやっているし、変わらないというのも面白いところです。やはり日本のサッカーの基本はそこにあるんじゃないかと思っています。

**山本** 北澤さん、現代の日本代表のサッカーの技術という点では、どういう評価ですか？

**北澤** わかりやすいところかというと、相手が来ても逃げない。相手との距離を近づけてもプレーができるというところに技術力が表れていると思います。今までは技術のない選手だと相手が来ると距離が50センチぐらいになるとパスしちゃうと思います。例えば南野や中島にしても、相手が来ても30センチぐらいまでなら怖がらない技術を持っているところが今の良さにつながっていると思うし、日本の技術力が活かされていると思います。本人が自信があるとその距離でも対処できる。あとはボールのコントロール、捉え方ですね。ちゃんと中心を捉えているかということ。あとは、ボールを蹴る時のインパクトもあります。ワールドカップ前の合宿に行った時に、国内組と海外組の違いがあったのが、シュートの時のインパクトの捉え方です。海外だとグラウンドもエグい中でやっているから、しっかり捉えていないといけな。そしてフォームが綺麗。タイミングがちゃんと整っているので、ボールにパワーが伝わっている。このインパクトの仕方が、韓国の選手の方が強いものを持っていると思います。

**後藤** 先ほど見た映像で、ウルグアイ戦の南野の得点シーンが映っていましたが、あの時、パスの強さ・スピードが今までの日本選手以上のものでした。それを南野が非常になめらかにコントロールしてシュートまで持ち込んでいますよね。そういう意味でも日本の選手の技術は間違いなく若い世代で上がっていると思います。

**山本** 韓国国内のサッカーの国家代表の技術という点では、評価が変わったりしてきていますか？

**李** そうですね。日本と変わらず、一人一人が圧倒的に巧いです。日本も韓国も問題は同じで、ゴールに向かってるのかどうか。そのプレーが何に向かってるのかを理解するスキルが大切です。今はみんな、ボールも蹴られるし、止められるし、上手いですから。ただし、

ドリブルにしてもシュートにしてもパスにしても、何のためにやっているかという意識が、ヨーロッパや南米の選手に比べて、曖昧になっていると思います。そういう意味で、スキル的にはまだ低いのではないかと評価になります。

**山本** ゴールに向かってるかどうか。これは北澤さん、大事なことですね。

**北澤** そうですね。ちょっと前に言われましたからね。どこに向かってるんだらうって。シュート打たないと入らないし、目的意識を失うと顕著に表れるのが、ボールをボンとコントロールした時に最初に横を向いてトラップしちゃっているんですよ。一回前を向くトラップが入らなくなってしまう。自分が目指す方向にボンと一発目でコントロールができて、そうすることによって相手が絞ってくるのでパスコースが生まれてくる。パスを探すためのコントロールをしているとインターセプトされる。目的意識を明確にしないといけない。守備でもそうですね。ゴールと結んだラインに立とうという理屈はありますが、普通そこを守ろうと思えばそうなる。大前提は外しちゃいけないです。サッカーの競技以外も全部そうだと思いますが、この設定は外してはいけないです。

**山本** 早川さんいかがですか？

**早川** さっき勝利に直結するファクターとスタッツという話をしましたが、パスが何人敵を通過して味方に行っているか。この味方が前を向いた時に一番高い得点がつく。8人飛ばして前を向いていたら8点、しかし後ろ向きでコントロールしたりボールを失ったら係数が0.8とか下がっていきます。今お二人が言われたように、どれだけ前に向けるかというのが勝利に直結するとヨーロッパでも評価されています。

**山本** 三つ目のパートは「組織」です。世界と戦う組織。組織というのはおそらく二つの意味があります。一つは代表チームのスタッフ、人員、サポートメンバーなどの組織。もう一つは、システムという意味での組織。この二つがあらうかと思います。組織論に関して後藤さんからまとめて評価をしていただけますか。

**後藤** 山本さんがおっしゃったように、組織とは非常に幅の広いものです。まず、代表チームの組織は、ワールドカップという舞台で戦う

ために何が必要なのか。これは経験を積まないといけない部分がある。最初に日本がワールドカップに出た時には、どういう準備をすればいいのかということがあったと思います。第一部で早川さんからそういうお話がありましたが、そういうものの積み重ねです。合宿地にどういうところを選んだらいいのか、トレーニングや移動などの日程作り等、いかに蓄積していくかという点が重要になるでしょう。早川さんが今まで蓄積されてこられた膨大な情報・知識を次の世代にどう活かしていくのが十分にできているのかどうか、後でお話いただきたいと思います。食事面や移動面をどうしていくか。また、もし外国人監督になったとき、その人に日本が蓄積してきた知識をどう使ってもらえるのか。そういうことも含めて蓄積できるかというのが協会としての組織じゃないかと思えます。また、触れるだけ言えば、組織といえば育成で、せっかく高いレベルの代表を経験したのに、チームに帰るとチームの中で自分の経験が活かさないこともあるだろうし、そういういろいろな面があると思うのですが、今の話で代表がメインの話になっていたんで、代表チームに関しては情報の蓄積が一番大事だと思います。

**山本** 北澤さんは日本サッカー協会の理事でもありますから、サッカー協会の組織論みたいなものをお願いします。

**北澤** そうですね。現場だけが世界のベスト8というだけではなく、運営する側のフロントも同じようにベスト8になる人材を育てなければいけないというところでしょう。これから日本は2020年に向けて、日本のスポーツ体制としてトップカテゴリーにならなければいけない。そのためには人材を育てなければいけない。監督がいろいろ変わってきましたが、自由さを導入した監督でうまくいかなくなると、今度は規律を持ち込んで、というように反省から監督を選んでいったように思います。途中からそれはなくなってきて、組織の人たちが何をしたいのかというのが少し蓄積され明確になってきたので、それに必要な監督を選び出したということだと思います。これはフロント側の話になります。

選手の時によく新しい選手が来たりして、その選手が組織プレーをわかっているかどうかというので、選手がパスを出した時に、他の選手は反対側にボールを出してもらいたいためにパスを出した、というのはわかっているのに、その選手がボールを持ちちゃったりする

と、「あー、ダメだな」みたいな感じで。バツときてすぐに組織に馴染めるかというのと難しいと思います。そこには新しい選手の経験も必要だと思うので。感じられる力がそもそも個人個人でないといけない。バツと何考えているか、ピッチでは瞬間的に考えないといけないんで。そもそも人間力として持っていないと。今何が必要なか判断できる選手じゃないと。組織としても機能できないと思います。

**山本** 韓国の場合の組織の考え方はどうなんですか？ 意見が非常に強く対立することもあるようなのですが。

**李** オーナーが変わる、会長が変わる、また監督が変わると全体のグループが変わるので、組織作りというのは難しいです。韓国の場合、人によることが多いです。協会もそうですし、言っているのかわかりませんが、国自体もそうです。

**北澤** なんか大変な話になってきました。

**李** そうですね。サッカーの話にしましょう。サッカー協会の会長はずっとヒュンダイから来た方が引き継いできているので、変わるとどうなるかわかりません。

**山本** 個性が韓国のパワーに繋がっているところもあると思います。

一方で、システムというやや小さな話もしてみましょう。後藤さん、日本人のプレースタイルと選手の個性・能力とシステムが強く連携していると思うのですが。

**後藤** システムというのは、3-4-3とか4-2-3-1とか、そういう選手の並び方を示すことによってサッカーの試合を見て理解するための道具のようなものにすぎません。例えば日本人の技術をどう活かすかということであれば、ディフェンダーが3人であろうが4人であろうが大した問題ではない。もっと重要なことはお互いの選手と選手の距離をどれくらいにするかということですね。例えばハリルホジッチさんのサッカーを僕が見ていてこれはダメだと思ったのは、個の力を大事にするのは分かるんだけど、組織を重視しない部分がある。例えばアジア予選のイラク戦で、イラクの選手と日本のフォワードが一对一で勝負するという場面がありましたが、相手はフィジカル面がとくに強い相手なんだから、周囲がもっとサポートしてあげないといけないんじゃない

いかと思いました。そういうシステムというよりスタイルの部分、日本の良さを活かすためにはどういうスタイルがいいのか。もしかしたら、50年後には日本人は背が高くフィジカルが強いと言われる時代が来るかも知れない。江戸時代の日本人と今の日本人では体の大きさが全然違いますからね。オランダ人があんなに大きくなったのは、第二次世界大戦後のことです。だからそれは何十年か経ったらわかりませんが、少なくとも今後10年、20年は、多分日本人の平均身長は海外の強豪より低いでしょう。筋肉量も少ないだろう。そういう中で戦うなら、互いに連携してサポートし合うスタイルというのは変えられない。システムというのは相手との対応でもあるので、どんどん進化し変わっていくと思いますが、スタイルの部分はこれからも大事にしていくべきだと思います。

**李** 先ほど韓国の協会の組織の話をしたんですが、フィールド内の組織について言うと、一人一人の役割分担が明確なチームとそうでないチームがあります。自分の役割を理解した上でピッチに立つかどうかで違ってきます。普段どういう練習を行っているかというのが大事で、いきなり試合になったら3-4-3、4-3-3とかそれはどうでもいい話で、一人一人が自分の仕事を理解している、理解させられるかというのが指導者として重要です。意識がある選手の多いチームがやはり強いです。

**山本** 北澤さん、選手の立場で言うと、芝生の上の組織、システムというのはわかりやすいということでメディアはよく使いますが、これは意識しますか？

**北澤** 日本人はその方が選手もわかりやすいと思います。決めてあげた方が対応しやすいように教育されてきている。イメージしやすいので当てはめた方がいい。しかし勝負は当てはめただけでは勝てなくなるので、いま言われたように、選手の意欲がある人たちが集まっているところが勝つということになります。トレンドはもうそうではなくて、固まってきている中で、攻撃のポジションと守備のポジションがあって、そのギャップをどうやってやり合うかになってきていると思います。それに対して戦術が入ってくるので、システムよりも戦術。勝っている時にどうする、負けている時にどうする、立ち上がりはどうする、タイムマネジメントなど、それぞれ対応ができる選手でない。これからさらにそういう時代になっていくと思います。適応するために、組織の中でいろいろ

な役割をしなければいけない。そうやってきた時にトレーニングを二つのポジションでやらなければいけないということになってくると思います。

**山本** 早川さん、これまでの最近の代表では、選手の捉え方で北澤さんが指摘されたことどう思われますか？

**早川** その通りだと思います。2010年に守備的なサッカーでベスト16に行けて、2014年の時は多くの選手が代表チームに残って攻撃的なサッカーでワールドカップに打って出るんだ、私がやってやるんだ、と言って敗退しました。ハリルホジッチさんになって、後藤さんが言われたように、背後に一人行って、戦うことができないことがわかったと思うんです。一人ではできない。今大会ですごく良かったのは、一人ではできない、だから自分を活かすために味方にこうやってほしいというコミュニケーションが多く生まれた。もしかしたら西野さんの戦略なのかもしれませんが、一人ではできないから、局面で人数を増やして戦うというのが日本のいいところだと思うので、システムが3枚でも4枚でも、自分の役割というか日本として局地で人数を増やすとか。そのために持久力は、勝負とはあまり関係ないですが、そういう面で大事になります。

**山本** 話を聞いていると、一つ一つのブロックがそれぞれ非常に密接な関係があって、切り離して論じるのは非常に厄介だと思います。そして四つ目のブロックは「育成」です。世界と戦う育成。日本の若い世代の代表も今女子が世界と戦っていますが、育成の制度は日本では「トレセン制度」が1980年から始まっています。後藤さん、けっこう長い歴史があると言っているんでしょうか。

**後藤** 「トレセン」という名前の制度ができたのは1980年代ですが、当時のトレセンと今のトレセンでは相当内容が違います。北澤さんの年代はご存知だと思いますが。とにかく、ナショナルチームを強くするためには、育成しないことには仕方がない。クラブチームだったら今の時代、世界中から選手を買ってあげればいいわけです。しかし代表チームは、外国生まれの選手を入れる場合も稀にあるが、自分のところでいい選手を生まなければ、どんないい監督が来ても、選手の能力が低かったら勝てるわけがない。育成がうまくいったら代表が強くなるということです。これはフランスが強くなった

のもそうだし、ドイツが一時世界を支配したのもそうだし、イングランドも若い選手がどんどん出ていますよね。イングランドもこのままじゃいけないということで、育成に力を入れて、素晴らしい施設を作ってこれから強くなると思います。日本がかつてアジアの中でも弱小と言われ、あるいは韓国には絶対勝てないような時代から、アジアの中ではトップの地位を収めたのはやはり1980年から90年代に育成がうまくいったというのが基本にあります。日本の場合、相当育成の部分でうまくいって、最近もU17、U19が来年の年代別のワールドグランプリに出場権を取りました。非常にうまくいっている。ただ怖いところは、いまここで手を抜いたら、5年後10年後に弱体化ということになるので、絶えず革新して新しいことにどんどん取り組んでいかなければいけない。そのためには育成用の施設も必要だし、それを担う人材も必要。Jリーグの各チームのコーチにどれだけ優秀な人材を配置できるか、そういう人たちが選手を育てるという仕事をどれだけ評価して、優秀なコーチがトップの監督になるより育成のコーチになる方が大事だという意識付けをする。それから日本の場合は、そこでせっかく育った選手が、上のレベルで挑戦しなければいけないところで、年代で分けられてしまう。そこが問題です。世界のサッカーを見れば、18歳、19歳が世界のトップにいる時代です。日本の場合でも能力がある選手は、最近久保（建英）くんが注目されていますが、15歳でも16歳でもどんどん上を目指せるような、さっきの組織の部分に関わりますが、育成のための組織。その点がこれから取り組むべき部分じゃないかと思っています。

**山本** 北澤さん、日本サッカー協会の立場を代弁していただくと、育成に関する日本の先の見通し、展望はどうなっていますか？

**北澤** 先の展望の前に、世界の基準から言えば、日本は育成面で大変優れていると思います。その年代が国際大会に出た時にも、下のカテゴリーでは優勝したりしますから。そこは何かと言うと、古くから日本の教育がしっかりしているところに、教育者がスポーツに対してそこに落とし込んでいるというのが何より成功した一因でしょう。それによって地域で大会もあり、これはJリーグが始まる前からこういうシステムが作られていた。そこで長期的に何を教えることによって、何が成功として獲得できるかということが正確にはわからなかったかもしれないが、トータル的なものを教え込

んでいたことが成果として出てきている。これは他の国々もやってきていることなので。25年間Jリーグをやってきた中で、指導者も育ってきた。20年ぐらい指導して来た結果、どういことが獲得できるかというのがわかった中で、育てていくのを実行しなければならない時代に来ている。その準備とかスキルとか内容とかはもちろん、今やっている最中です。

**山本** 李先生は、日本の育成をどういう風に見ていますか？ 若い世代を指導されていると思いますか？

**李** 僕は仙台育英高校でコーチの経験をしました。その時は日本の高校生と関わったのが短かったのですが、大学でもいろいろな選手を見てきました。全日本大学サッカー連盟、関東大学サッカー連盟は、やはり1、2年生にけっこう力を入れている。昔と違い今は人数も多いため、試合回数が少なくなっている。全日本、関東共に1年生だけの選抜チームや、新人戦、海外遠征をさせてそこでいろいろな経験をさせる。いろいろ策は出ている。フロンターレの小林悠をはじめ、その前の長友選手は明治大のOBで、慶応の武藤、慶應の森本選手、長澤選手、中澤選手など皆その出身です。そういう意味ではこれからも続けてやる必要があると思います。

**山本** 北澤さん、最近若い選手が、10代の半ばぐらいでヨーロッパに行って、ヨーロッパのプロのクラブの下部のリーグでプレーをしたり、場合によってはトップに上がってきたり、こういうことが少しずつ増えてきています。

**北澤** もともと能力やセンスがないと、そこに行っても吸収できないと思うんですが、久保くんなんかにしても意欲的です。今日と同じことをしていたら、明日は私のポジションない、という毎日を繰り返しています。だからすごくハングリーです。確かに技術力とかそういうものの違いがあって海外に行ってチャレンジしようとするが、自分が意欲的さえいけば行かなくてもできると思うんですよ。そういうハングリーな人が集まってきている中で自分がそこにいるので、一生懸命その時を大事にしていくところが海外組の強みだと思います。日本のリーグがそうっていけば、そういった選手が育つと思うし、意欲的な環境をどうやって作るかということと、そもそも本人がそうなるかならないかということも必要



かなと思います。

**山本** 我々周りを見て行動してしまうタイプの国民性ですからね。

**北澤** 周りに合わせるというかね。

**山本** 周りがやっているから私もやらないといけない。

**北澤** 人間そうだと思うので、そういう環境に自分を落とし込めばそう変化するというのもあると思います。

**山本** 早川さん、一方で代表にやってくる若い世代、育成は必ずしも若い人たちだけが育成じゃなくて、20代に入っても実は育成されてきている代表選手がいるはず。5大会の変化のなかで、この辺はどう見えていますか？

**早川** 本当に育成は難しいと思います。北澤さんには失礼ですが、あの当時の代表選手と比べて、育成されてきている今の代表選手は、自分自身でやるための多くの情報があって、それを実際自分でできている。北澤さんたちの頃は、まず情報がなく、情報を与えるのは僕らで、僕らの引き出しもそれほど多くない。二つ三つ

与えて、その中から一つぐらいやる。でも、今の人は、僕らが10、他から情報を10、その中でやるのが15、16あるというような世界です。そういう意味では、今の子どもたちは下からそういう教育を受けることができるので、それを持って上に上がってくる。それは代表チームにいるからそういうことができるわけではなく、代表チームにいても、高校にいても中学にいても大学にいても、いろいろな情報を持ってきちんと自分に向き合うことができる選手が増えているような気がします。

**山本** 四つのブロックにわたって話を進めて参りましたが、最後に、ご登壇の皆さんに一言ずつこの四つのブロックの中から、「日本代表ワールドカップの経験から将来に何を繋げていくのか」に関し、一つのブロックの中のタグを引っ張り出して、メッセージとして残していただきたいと思います。四つのブロックは「技術」「組織」「フィジカル」そして「育成」、このうちの一つを取り上げて、日本代表がこの先4年後さらに8年後そしていつかもう一度日本で開催したいというワールドカップが来る頃までに、ここをこれくらいステップアップさせるべきではないか、そんな話を一言ずつ伺いたいと思います。李先生からお願いします。

**李** 私の場合は「育成」のところ。まず経験豊かな指導者を派遣する。さっきの話にあったように、トップがメインではなく、育成がメインのベテランの指導者にしないと、良い選手を育てられないというのが自分の中です。どうしても、引退したばかりの若手の指導者が多く、彼らは勉強してトップに行きたいので途中でいなくなるわけです。そうではなく、いろいろな経験をしてきたベテランの指導者が下に降りて、そこで育成してくれば良い人材を育てられるかなと思っています。

**山本** ありがとうございます。北澤さん。

**北澤** 決められないですね。どれも必要だと思っているので。「育成」というか、学び続けることをしていなければならないと思います。日本のスポーツにおける立ち位置はそこだと思います。経験をどれだけ次に向かって活かしていくかということ。経験をどう数値化してそれを分かりやすくして次の世代にどうやって活かして貰うかということをしていかないと、やってきた意味がない。僕が日本代表をやってきたというのは、歴史の年表の上に立ってきたと思っていて、今まで先輩がやってきたものをどう次に繋ぐのかということが日本代表だと思っています。今回のこともテーマという以





上に、本当に自分が考えていたことだと思います。「育成」部分で学びをどう継承していくかということですね。

**山本** ありがとうございます。後藤さん。

**後藤** 「育成」という面で、さっき日本のスタイルを目指すということを言いました。育成年代に日本のスタイルはこれだということを確立しておくことの必要性。日本代表は今ご承知のように、ほとんどの選手が海外のいろいろな国のいろいろなクラブに分散していて、それが急に集まってほとんど準備期間もなしに試合をしなければいけない。そういう状況です。これが例えばスペインだったら、レアル・マドリードとバルセロナという二つのクラブの選手を集めてくる。ドイツだったら、バイエルン・ミュンヘンの選手を集めてくる。そこである程度コンビネーションが確立されたクラブのユニットを使うことができますが、今の日本はコンディションはバラバラ、普段やっているサッカーはバラバラ、乾いたコンディションでやっているチームもあれば、雨ばかりのところで行っている選手もいる。いろいろなものを集めなければいけない。そこで、一つのまとまった試合をパッと集まってパッとするには、若い年代から日本代表のサッカーのスタイルはこれだと身につけるようなことをしていかなければいけない。そのためには、何が必要かというと、各年代で一つの方向性をきちんと持たせる。今までだと、例えばフル代表はハリルホジッチさんで、オリンピックは誰、監督によって全然違うことをやっていた。だから、せっかくオリンピックで活躍した選手がフル代表に行けないということがよくあった。そういうことを含めて全体の方向性をきちんとすべきだというのが一点です。ただ、同時に、では日本中のコーチが同じことを教えればいいのか。これ

は違う。同じような選手がいっぱいいる。巧いけれど規格外の選手が出てこないと困ったことになる。どの部分はグランドデザインとして一つの方向性を持たせるのか、どの部分は各クラブによって独自性を持たせるのか、その辺まで含めて将来全体としてこうやっていくということをどこかで決めてもらわないといけないので、サッカー協会理事の北澤さん、頑張ってください。

**山本** ありがとうございます。では、早川さん。

**早川** 最後が僕でいいんですか。「フィジカル」になっちゃいますが。サッカーの体力は、「持久力」と「高強度運動」と「スピード」と「筋のパワー」の大きく4つがあります。もちろんコーディネーション、アジリティとありますが、大きくは前述の4つがあります。日本人はこういうところでは優位性がある、こういうところでは伸びしろがまだたくさんある、韓国はここが強い。というようなものがあります。育成年代で、3年前から代表チームにフィジカルコーチをつけることになりました。体力テストをやると、フィジカルコーチをつけたカテゴリーの数値が軒並み良いというのがわかりました。もちろんこの数値が高いだけがサッカー選手の評価ではないのですが、やはり野球の大谷選手のようにアスリートの能力があって、そして技術や戦術勘が高いというのが理想ですから、体力の数値は高いに越したことはない。これから何が言えるかというと、サッカー選手はサッカーしかやっていないのではないのか。果たしてサッカーだけやっていては伸びない能力はある。なぜなら最大のスピードが毎回のテストで出るわけじゃないし、練習によっては1週間の中で本当にその人の最大スピードが出ているかもわからない。そのために今GPSとかが出てきているので、そういうもので評価することができるようになりました。筋のパワーの発揮というのは、残念ながらサッカーだけでは大きくは向上していかないので、サッカーから取り出してやるが必要になる。これを育成年代から計画的にやらなければいけないと思います。この3年間、アンダーカテゴリーの日本代表の選手のテストをやりました。ハイジャンプをみると、5段階評価のすごく飛ぶ人が5、全然飛べない人が1ですが、これを国立スポーツ科学センターの他競技の選手の数値を比べると、この19歳のサッカー選手の数値はなんと2でした。ということは、海外の選手と比べても、国内の他競技の選手と比べてもパワーが

物足りない。これを体格のせいにはしてはいけません。もちろん体格の違いはあるが、やはりやれていないのではないのか。少なくとも世界と戦うと言っている種目の19歳の代表選手が「2」では心もとない。ここを4とか5にしていかなければいけない。これをやるには、プロになってからやるのではなく、小学生から何かの働きかけがあって、継続的に中学生、高校生、プロになったら更にこういうところを専門的にやっていかなければならないでしょう。フィジカル面ではすごく強くなっていくと思います。

**山本** ありがとうございます。それぞれ皆さんのアクション・アクティビティをずっと貫いてこられたバックグラウンドから話をさせていただきました。

残り時間がわずかとなりましたが、質問があれば受け付けます。どなたに対して答えが欲しいのか、また自分のお名前を言って質問をお願いします。質問のある方どうぞ。

**参加者2** 今日はありがとうございます。北澤さんにご質問です。育成というところで、今ご自身でもサッカーチームの運営をされていると思います。勝利至上主義になってはいけないとはいえ、良い指導者は育成と同時に勝利も求められます。私も小学生年代を見ていましたが、勝たないと指導者として認められないというところがあります。プロは勝たないとクビですが、育成のところは育成プラス勝利を目指すところが非常に大事ですが、私の周りでは育成しているから、勝たなくてもいいという指導者もいたんですが、育成と勝つことに対するご自身の考え方を教えてください。

**北澤** 言っている通りです。育成の中でも年代があって、幼稚園ぐらいの年代でそこまで持たせるかどうかというのは、何を指導していくかということだと思います。ただ試合で喜べるのは、勝った負けたということだと思うので、意識させるということよりそういった方向に持っていきけるかという指導のやり方だと思います。ただ、6年生ぐらいになれば当然そうではなく、勝ち上がれなくなってくるので、あとはギリギリの戦いの中で勝つか負けるかというところは持っていないと、意欲にも繋がらないと思うので、融合をどうさせるかの難しさというのをどう体系立てていくかがこれからの指導者の資格になってくると思います。

**早川** スポーツなので、勝つというのは大前

提だと思えます。ただ、育成をこう伸ばすという目的があるというのももちろんなので、そういう中でチームが勝つためには、チームとしての練習が多くなります。ただ一番大きな目的が個であれば、個の練習の数が多くないと辻褄が合わなくなると思えます。結果がどうなるかはわかりませんが、僕の中では、個の、一人を伸ばすための練習がどれだけクラブの中に入っているのかというのが大きなポイントだと思います。

**山本** ありがとうございます。時間の関係でもうひとつ、もしあれば。

**参加者3** 今日は貴重なお話をたくさんしていただき、ありがとうございました。早川さんにお伺いしたいのですが、僕もTVでベルギー戦を見ていてワールドカップ全体で興奮したんですが、最後の3失点をしたところで、チームとしてはドローで点を決めなくても良かった状況で、最後のコーナーキックで90分の中で勝ちに行って、5人ぐらい中に入って、結果的にああいう形になりましたが、ベンチとしては、あの時はどういう判断だったのですか。

**早川** ありがとうございます。ちょっと西野さんに電話してみますね。僕はその時のベンチ

の状況はわかりません。僕は立場的に時間が経てば経つほど日本に有利だと思っていましたし、選手に「エキストラに行ったら日本が勝っていたんじゃないのか」と言ったら、特にディフェンスの選手たちに、延長に行ったら僕らやられていましたよという選手が多かったように思います。その中で、そういう風に全員考えているから、本田が決めようと思って、ああいうシンプルなボールを入れたのかというところまではわかりません。でも本田は直接、その前にあわやといういいフリーキックがあって、その勢いでポンと蹴ったのかもしれないし、香川真司はショートコーナーを予想して本田のショートコーナーのポジションに入っていましたし、いろいろな要素があって、それが経験なのかなと思います。ああいう時にどうすべきかというのはきちんと継承されていかないといけない。いいとか悪いとかではなく。負けたから悪いんですが、負けたら絶対にダメなんです。絶対勝たないと。だけど、中の選手はそういう風に感じた人がいたということ、あとは香川がショートコーナーをやろうと思って機を作ったということ、香川とセンターラインの間にあるボールが入るので、香川も中に入っていたらあそこにはボールが出てこなかったかもしれないし、後から見るといろいろなことが言えると思うんですが、質問の結論

から言うと、西野さんに電話しないとわかりません。

**山本** 高橋くん、どうもありがとうございます。

第二部はこれから先のことを考えながら少し後ろを振り返って話をして参りました。ご出演は、李宇諤先生、北澤豪さん、後藤健生さん、そして早川直樹さんでした。どうもありがとうございました。

**一同** ありがとうございます。

**飯田** ありがとうございます。皆さん様々な立場からいろいろな意見を出していただきましたが、最終的には、常にブラッシュアップする個があって、そして組織との折り合いがあって、世界を見る。ここは共通していたと思います。たまたまサッカーという窓からいろいろお話をいただきましたが、自分のやっていること、日常もたった一歩方向やそのベクトルを変えるだけで、大きく変わると思いますので、ぜひ今日のこの時間を無駄にしないように今後もやっていてもらいたいと思います。今日は本当にお疲れ様でした。

